

《海外展望》

## 激動の朝鮮半島

### 日本が立場を鮮明にすべき時が来た！

北朝鮮のNO. 2で金正恩の後見人と目されていた張成沢が処刑され、半島情勢が一気に緊張している。張成沢失脚、処刑の裏側に関してはさまざまな憶測が流され、北朝鮮が危険な状態にあるとする観測もある。

#### 張成沢処刑前後の状況分析

12月3、4日ごろ、韓国筋と中国筋の一部から「北朝鮮の張成沢が失脚したようだ」とする情報が流され、日本でもネット上でそんな話が取り上げられていた。そんな状況下、12月9日に、「12月8日に金正恩第一書記が『朝鮮労働党中央委員会政治局拡大会議』を招集し、張成沢氏を『すべての職務から解任して一切の称号を剥奪し、党から除名する』ことを決めた」と北朝鮮が発表した。

この時点で日本だけではなく韓国、中国でも「張成沢のカネ、女、バクチ、麻薬」が問題になったとささやかれていた。張成沢のドロドロした汚さ、下品な言動がまことしやかに語られ、週刊誌などは下ネタ一辺倒といった雰囲気。ところが「張成沢が国家反逆罪で13日に死刑に処された」と発表されるや、一気に緊張感が高まった。カネや女の問題だけで、死刑にすることなどあるのか。金正恩第一書記は正常な判断が

冷静に状況を見ていくと、半島がいま日清戦争前後の状況に似ていることが見てとれる。しかし残念ながら、そこに日本は存在しない。

できていないのではないか。一部ではそんな声も聞かれるようになった。

張成沢処刑の報道がまだ出ていない12月8日に、中国国内で北朝鮮関係者が異常な状況にあるとの情報が流れてきた。中国国内に滞在する貿易関係者など、張成沢に近い北朝鮮の人間100人以上と連絡がとれない状況になっているというのだ。情報によると、30人くらいは召喚命令を受けて本国に帰ったという。残りは中国国内に留まったまま姿を隠したと思われるが、いずれにしてもすべての人と連絡がとれない状況になったという。

張成沢が全職務解任、党除名と発表された9日には、「張成沢が8日に銃殺刑に処せられた」との噂が飛び交った。なかには「5日に処刑された」といった話もある。処刑された日がいつなのかは確認できないが、すでに9日の時点で張成沢の処刑は「あり得ること」と受け止められていた。

## 国家反逆罪

金日成の娘である金敬姫が大学生時代に張成沢にあこがれ、結婚したいといい出したとき、父金日成主席は猛反対したという。それをとりなしたのは金正日総書記だった。しかし金正日政権時代の2003年秋に張成沢は失脚し、長らく表舞台に顔を出さなかった。それが2006年には再び返り咲いた。そして2010年には北朝鮮NO.2の座に就いたのだ。

金正日の長男で香港、マカオを中心に中国や東南アジアで活動する金正男とも親しく連絡をとり、また中国に太いパイプを作り上げたことから、張成沢は北朝鮮のカネの動きをかなりコントロールできる立場にあった。さらに日本との人脈も持ち、文字通り北朝鮮NO.2として活躍していた。北朝鮮と密接な関係を持つ数少ない日本の政財界、宗教関係者は張成沢を唯一のパイプと考え、携帯電話で連絡をとりあう仲だったという日本人も何人かいる。

金正男は金正恩が第一書記の座に就いて以来、ほとんど雲隠れ状態。マカオやシンガポールあるいは北京で目撃されたとの情報はあがるが、行動は不明だ。それでも金正

男が張成沢と連絡をとりあっていることは間違いなかった。「金正男+張成沢」は北朝鮮と中国を結ぶ最強カードだったわけだ。

国家の重要人物だった張成沢が処刑されたウラには、カネ・女・麻薬などといった下劣な罪状ではなく、歴とした国家反逆行為があったことはたしかだ。金正恩第一書記の妻、李雪主に手を出したとか、張成沢万歳といったとか、その程度の罪状でNO.2を処刑することはない。正確な事情は不明だが、国家安全保衛部が緻密な徹底調査を行い、死刑とされるべき明々白々な証拠を積み重ねた結果と判断できる。

張成沢の罪状を調べ上げた国家安全保衛部の金元弘（キムウォンホン）部長は、金正恩第一書記体制で重要な地位にあり、13日に亡くなった金国泰の葬儀では第14位に序されている。党・軍の内部をスパイし、反体制派摘発を行う秘密警察＝国家安全保衛部によって北朝鮮の強固な体制が支えられており、金元弘は今後も重用されるだろう。この体制を構築したのは金策、そしてその息子の金国泰、金乙男兄弟とされる。

## 中朝関係は冷却に向かう

北朝鮮の親中国派の巨頭だった張成沢が処刑された結果、中朝関係が厳しくなるのではないかとする見方がある。じっさいのところ、厳しく対立することはないだろうが、関係の悪化は避けられない。

張成沢の処刑について最も衝撃を受けた

のは韓国だと思われる。青瓦台では直ちに緊急会議が開かれたし、米国もホワイトハウスがすぐにコメントを出すほど、北朝鮮情勢に敏感だった。ところが、ほんらい最も緊張するのではないかとされる中国政府は、意外と冷静である。張成沢の「国家

「反逆罪」の中に、「国の貴重な資源を安値で売る売国行為」という項があった。ここでいう「資源を安く買った国」とは、誰にでも中国だということが理解できる。張成沢を処刑しておきながら、中国側の犯罪的行為に目をつぶり、中国に直接文句をいっていない。ここに北朝鮮外交の巧みさを感じる。

日本のマスコミを見ている限り理解しにくいだろうが、北朝鮮という国は世界でも稀なほど外交手腕に長けている。外交の天才とあっていいだろう。ウソをつけ！と思われるかもしれないが、これだけは理解していただきたい。――北朝鮮は建国以来、米国、ソ連（後のロシア）、中国という巨大3カ国に締め付けられ、猛烈な圧力をかけられ、それでもなお平然と存在し、核兵器まで持つに至っている。類稀な外交能力が存在したから、こんな離れ業ができたのだ。

張成沢が資源を安売りした事実に関し、北朝鮮当局は明確な証拠を握ったはずだ。ということは当然、中国側に賄賂を受け取った人物がいたわけで、それを北朝鮮は握っている。それも中国政府の大物で、しかも1人や2人ではない。北朝鮮がその事実をスッパ抜いたら、中国政界が大混乱するほどのものだろう。いわば北朝鮮は中国政府を脅して、張成沢の処刑を納得させたと考えられる。

これを推測させる出来事があった。

中国の『環球時報』が「金正恩は早急に北京を訪れて説明すべきだ」という社説を掲げ、それを中国共産党機関紙『人民日報』

が転載したのだ。『環球時報』も元は『人民日報』の国際版で、どちらも党機関紙のようなものだが、こうした手法を使った理由は、政府や党が表立って金正恩を呼び付けることができない弱みがあるとしか考えられない。中国政府は誰もが苦虫を噛みつぶしたような顔で北朝鮮状況を眺めているだろうが、強気に出られない事情があるのだ。

張成沢が処刑されたとの情報が流れ始めた今年（12月）初旬から、黄金坪島（ファンググムピョン）や威化島（ウィファド）の協力事業が中断している。鴨緑江にあるこれらの島（実際には中国の丹東市と陸続き）は中朝経済事業の一環として2011年6月に着工式が行われたが、北朝鮮軍が島に駐留していることなどから事業はストップしていた。昨年（2012年）8月に張成沢が訪中して「中朝経済活性化」で合意。直後に中国は14億円の国庫補助を行い基礎工事を進めてきた。それが今回の事件で、またも工事が停止する事態に陥っている。

北朝鮮側は、張成沢の下で経済改革路線を実行してきた朴奉珠（パクボンジュ）首相が事業を引き継ぐから問題ないとしているが、中国の投資家たちは「投資リスク」が大きいことを改めて認知し、一斉に手を引き始めている。それは黄金坪島投資に限らず、北朝鮮関連の貿易、事業など全般にわたると思われ、中朝間の経済交流が停滞する可能性が高い。

経済分野だけではなく政治的にも今後しばらく、中朝関係は「険しい対立」ではなく「冷たい儀礼的外交」に向かうだろう。

## 日朝関係は修復不可能か

日朝関係にとって張成沢が消えたことはマイナスになるとの懸念もある。たしかに、一部では張成沢だけを頼りにしていた日本政財界の面々がいたことは事実である。しかし北朝鮮側は、むしろ、張成沢がいなくなって日本との交渉がやりやすくなったと考えているのではないだろうか。

今年（平成 25 年）5 月に飯島勲内閣官房参与が訪朝した。

飯島の訪朝は北朝鮮側からの「お誘い」に乗ったものだが、このとき飯島は平壤の万寿台議事堂で金永南最高人民会議常任委員長と会談している。金永南は金日成時代からの重鎮で、党内序列第 2 位の人物。外交的には各国の首相、大統領と会談するクラスで、飯島と会うなど、とても考えられないものだったが、これを差配したのは金正恩第一書記だったとされる。普通に考えれば、飯島参与が会える最高の大物クラスは宋日昊（ソン・イルホ）日朝国交正常化大使くらい。その上として張成沢が考えられた。飯島との会談に金永南が登場したということは、今年 5 月の時点で、金正恩第一書記は張成沢を日朝関係の主役にさせない覚悟を決めていたわけだ。

本紙は 2008 年に《噂の怪奇情報》として「金策」の正体に迫ろうとした記事を掲載

### 来春早々に山場が来る

張成沢処刑で中国は冷めた感覚を持っているようだが、米韓はかなり緊張している。13 日の張成沢処刑の報が出た直後から韓国は軍事即応態勢を強化。16 日になると改めて朴槿恵大統領は北朝鮮による「無謀な挑発」の可能性を警告した。

した。この情報がどれほど正確であるかは、正直なところ把握できていない。しかし金策、金国泰、金乙男が北朝鮮の金王朝体制をウラから支えてきたことは間違いない。国家安全保衛部という組織も金策・金国泰父子によって作られている。飯島を平壤に呼び、金永南と会談させた背後にも金国泰が動いていたとの説も強い。

情報通の中には、金策、金国泰、金乙男という父子は、北朝鮮の裏支配者、日本風にいえば「裏天皇」だと説明する者もいる。裏支配者とは怪しげな発想だが、たしかに彼らには、北朝鮮を背後から動かす能力があった。その彼らが、金永南まで動員して日朝関係修復を希求している。

中国との関係が従前より冷めたものになるからには、北朝鮮はどこかに政治的、経済的突破口を見出す必要がある。ドイツ、スイスを初め欧州には北朝鮮と良好な関係を築いている国々もあるが、はるか離れた国より近隣との関係構築が望ましい。そうした面から考えても、ほんらいは『日朝平壤宣言』に基づいて、日朝関係を構築する大チャンスが到来していると考えられるべきだが、残念ながら

日本に国際政治を見通せる能力がないように思える。

米国のシンクタンク『新米国家安全保障センター（CNAS）』のアジア太平洋安全保障プログラム担当者 P・クローニン氏は「金第一書記は 1950 年（朝鮮戦争勃発）以来となる最大の挑発行為に踏み切る可能性がある」と指摘する。「侵略を開始するとは思わ

ないが、核弾頭ミサイルの配備、一段と好戦的な言動、北方限界線を越える攻撃や島の占領などの可能性を排除すべきではない」と分析している。

事情通などの意見は分かれているが、一致しているのは来春1月～3月の間に北朝鮮が何らかの行動を起こすだろうという点だ。ミサイル実験、核実験などではなく、小規模な戦闘が考えられるという。こうした危機状況に直面している韓国は、現在、政治的にも経済的にも迷路に落ち込み、中国だけが頼りといった雰囲気にある。

明治の中ごろ、朝鮮国（李氏朝鮮）をめぐる日本と中国（清）が対立したことがあった。日本の内部でも朝鮮政策をめぐる対立が激化したが、その後朝鮮をめぐる日中の争いは日清戦争（明治27年1894年）に発展する。日本が勝利した後には、朝鮮内部では日本を支持する国王の父、大院君と国王の妃、閔妃の対立が深刻になり、そうした中、開化派の金玉均が殺害されるという事件を迎える。明治28年（1895年）には乙未事変が起きて閔妃が殺害される。朝鮮国の不安定さが日本、中国、ロシアを巻き込んだ東亜大乱に結びついたので。

いま朝鮮半島は、中国に擦り寄る韓国と、中国から離れようとする北朝鮮により、半島混乱の状況が生まれている。しかも世界は混乱期を迎え、米中ともいつ火薬庫が火を噴くかわからないような状況に陥っている。

東京都知事の猪瀬は徳州会からの5000万円問題で辞任に追い込まれ、みんなの党から結いの党が分離独立した。国内的にも小さな事件のように見えるが、これは前触れの可能性もある。来春には世界が激震しそうな雰囲気が満ち溢れており、消費税導入直前に日本政界も激震に見舞われる可能性もじゅうぶんにある。

激動の平成25年は、まもなく幕を閉じるが、来る平成26年は、今年にもまして大激動の年になりそうだ。■